様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年６月２４日現在

機関番号：８５５０２
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０５２０３１２
研究課題名（和文）　ファシズムとの関連におけるA. ボイムラーとトーマス・マンとの比較

研究課題名（英文）Comparison between A. Baeumler and Thomas Mann related to Fascism

研究代表者
中島　邦雄（NAKASHIMA KUNIO）

研究者番号：00416455

研究成果の概要（和文）：　神話解釈を通じて欧米の合理主義を批判する点で共通の基盤に立ちながら、A. ボイムラーはヘーゲル的啓蒙主義からファシズムへと到り、一方 Th. マンは保守主義から民主主義へと逆のコースをたどった。なぜこのような現象が生じたのか？ボイムラーの著したバッハオーフェン著作集への序文と、それに対するマンの批判を手がかりに、ボイムラーの場合その原因が、序文に見られる彼の思想の論理的矛盾にあることを証明した。

研究成果の概要（英文）：　Th. Mann and A. Baeumler stand on the same basis, where they criticized the European Rationalism by their mythological interpretation of culture. They left nevertheless two contrasted tracks of the political view: A. Baeumler, a Hegelian of the Enlightenment, transformed into a Nazi, while conservative Th. Mann went his way to democracy. Why did such a crossing happen? It was confirmed by the analysis of A. Baeumler's "Introduction" to Bachofen-Anthology and with help of Th. Manns criticism of it, that in case of A. Baeumler, it came from the logical contradiction of his thought in his "Introduction".

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	100,000	30,000	130,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：ヨーロッパ文学、独文学
キーワード：神話、ロマン主義、ファシズム、啓蒙主義、母権制、エコロジー

１．研究開始当初の背景

(1)　ナチズムの思想的背景がたんにローゼンベルクの粗雑な哲学に代表されるだけならば、ナチズムの脅威を現在にいたるまで問題にする必要はないが、この運動はハイデガーの思想やエコロジー運動、現代のフェミニズムとも深いところで関わっている。この関わりを解明する必要がある。

(2)　研究代表者は、もともとトーマス・マンを中心に研究してきたが、その幅を広げて環境文学も視野に入れ、論文や翻訳を行なってきた。その過程で、エコロジーと青年運動、およびナチズムの関わりに興味を持ち、ナチ

ズムの先駆といえる A. ボイムラーの思想を、トーマス・マンと比較して深く考察したい考えた。

2．研究の目的

バッハオーフェンの『東洋と西洋の神話』のために書かれた A. ボイムラーの序文「ロマン主義の神話学者バッハオーフェン」を分析することによって、この著作へのトーマス・マンの批判が客観的に正しかったかどうかを検証することを通じて、神話学を再興することで西洋合理主義を克服しようと考える点で共通の志向をもっていた２人の立脚点の微妙な相違を明らかにする。さらにその相違がその後、ファシズムと民主主義的な人文主義という２人の逆の思想的立場につながっていくことを明らかにする。

3．研究の方法

(1)　A. ボイムラーによる序文「ロマン主義の神話学者バッハオーフェン」に表された思想および文体を緻密に分析することによって、この書を非難したトーマス・マンの批判が具体的に序文のどの箇所を念頭においてなされているかを検証し、それがトーマス・マンの誤解に基づいていたことを明らかにするだけでなく、その誤解が生じる原因となった A. ボイムラーの思想に潜む矛盾を実証する。この誤解と矛盾こそが実は、当時２人がまだ完全には意識していなかった後の彼らの思想的立場を先取りしているからである。

(2)　このテーマに触れた A. ボイムラー、バッハオーフェン、トーマス・マンに関する日独の研究書を読む。またチューリヒでトーマス・マンの所蔵していた「序文」を調査し、そこへの書き込みからトーマス・マンが「序文」の個々の箇所に対して抱いた感想や批判を確かめる。さらに A. ボイムラーへのトーマス・マンの批判の経緯および思想的背景を知るために、ミュンヘン等２人のゆかりの地を訪れ、民族博物館などの展示物や最新の成果を調査する。

4．研究成果

A. ボイムラーの序文「ロマン主義の神話学者バッハオーフェン」を分析・研究して、次のような知見を得た。

(1)　序文の構成に見られる構造的な矛盾について

「序文」は３章からなり、第１章では宗教的な観点から、古典古代ギリシアにおける文学史が啓蒙と土着的な祖先崇拝との対立として論じられる。第２章ではドイツ・ロマン主義に見られる前期ロマン派と後期ロマン派の流れを対立するものとして位置づけ、前者を批判して国粋主義的・民俗学的な後者を評価している。第３章ではバッハオーフェンを後期ロマン派の最後に位置づけた上で、バッハオーフェンの母権制についてヘーゲルの弁証法的・啓蒙主義的な歴史観に則って説明される。

この３章全体にわたって、グローバルな啓蒙と死や墓を礼賛する地域主義という二つの対立テーマをめぐって論じられている点では「序文」は一貫しているが、各章は本来独立しており、したがって章間のつながりは薄くルーズな章立てとなっている。各章での思想的結論は、第２章では民俗学的な血と大地と死への志向に賛同しており、第３章では逆に啓蒙主義の立場に立っている。第１章では最初啓蒙主義の立場に立つように見えながら、次第に冥界的領域への志向を強め、最終的結論として所々に啓蒙的な図式を持ち出しながらも、イローニッシュな文体のためにその一義性が判別しがたいものとなっている。

A. ボイムラーはヘーゲルの弁証法的立場に立ち、「序文」全体の構成において啓蒙主義的な世界観を確立するために、そのアンチテーゼとして死と墓穴という地下領域を持ち出したと思われるが、このアンチテーゼの叙述がきわめて雄弁で迫力があり、一方、それを止揚する啓蒙主義を主張する第３章の論理展開は難解であるため、読者にはアンチテーゼである反啓蒙主義的な立場ばかりが印象づけられる結果となっている。それが、特に『魔の山』執筆後のトーマス・マンにとっては、『魔の山』で何とか苦労して克服したロマン主義的世界の臆面もない復活、およびトーマス・マンの考える人文主義的の否定・転倒と映り、反発を招いたと考えられる。一方、当時ヘーゲル主義者を自認していた A. ボイムラー自身にとっても、彼の思想の奥底にあり、やがてナチス入党によって証明される民族主義的な資質が、「序文」での冥府的な領域の執筆を通してあふれ出し、後に著者自身が逆に自分の本来の思想に気づくという事態が生じたと考えられる。

A. ボイムラーもトーマス・マンも考古学的・民俗学的な成果である死と墓穴の地下的領域の発見を評価して、狭い意味での啓蒙主義を超える神話学的な世界観を構想したの

であるが、、その向かう方向は逆であり、トーマス・マンの批判は誤解に基づいてはいたが、その微妙ではあっても本質的な差異を認識した点において正しかった。

(2) トーマス・マンによる「序文」受容の具体的な経緯

トーマス・マンによるA.ボイムラーの「序文」への書き込みと『パリ訪問記』での批判から推測される、トーマス・マンによる「序文」受容は次のようなものであった：構想の壮大さ、文章の巧みさなどの点からみて、トーマス・マンは感嘆の念をもって「序文」を読み始めた。しかし読み進めるにつれて次第に違和感を抱き始める。ホメロスの叙事詩に関してその背後にある冥府的側面が強調され、「夜への熱中」や「大地、民族、自然、過去、死」についての観念連合を思い起こさざるをえない箇所が頻出してくる辺りからである。作品構造のねじれに由来するこの不信感が、A. ボイムラーの想定する、バッハオーフェンにみられる弁証法的な思想図式を誤読する原因となった。第 3 章でトーマス・マンが欄外に記した「何とも奇妙な」という書き込みは、彼はA.ボイムラーの主張を理解できなかったのではなく、結果的にはその主張を拒否したものの、逆にそこでは正しく理解したからこそ、第2章との整合性の点で矛盾することに注意を促しているのである。

(3) 冥府的領域を強調した理由

A.ボイムラーが民俗学的な成果に基づいて古典古代やロマン主義にみられる死と墓穴に象徴される冥府的領域を、あえて誤解を招くまでに強調した理由は、ニーチェの『悲劇の誕生』に代わる、彼独自の新しいギリシア悲劇発生の仮説を主張したかったからであったと考えられる。ギリシア悲劇の起源をバッコス的な祭礼に求めるニーチェに対して、A.ボイムラーは、地方で行われた、亡くなった土地のヘロスを奉る祭式を発生起源と考えた。その際、自説を際立たせ、正当性を主張するために、彼はバッハオーフェンを持ち上げてニーチェを批判し、大地と血と墓穴の象徴をオカルト的に強調しすぎた。それが結果的に「序文」の反啓蒙主義的な色彩が濃くなった理由である。ニーチェを愛していたトーマス・マンにとってこうした扱いは我慢がならないことであったが、元々これはボイムラーの思想的資質に根ざしていたと言える。

(4)現代におけるボイムラーによるギリシア悲劇誕生の仮説の評価

ギリシア悲劇誕生の経緯は現在にいたるまで解明されていないが、日本では『ギリシア神話の世界観』(藤縄謙三、1971 年)のなかで、ボイムラーによる悲劇発生の仮説が紹介されており、しかもニーチェのそれよりも信憑性が高いものと評価されている。純粋に学問的に見ればボイムラーの仮説はそれなりの論理的正当性をもっている。トーマス・マンも『ヨゼフ』4部作では、ボイムラーの古典古代の宗教的解釈をいくつか取り入れている。しかしトーマス・マンによって批判され拒絶されたのは、本来学問的で客観的な仮説を反啓蒙主義的な価値の中に組み込んでいく巧妙なやり方であり、当時啓蒙主義者であったボイムラーの根底に潜んでいた民族主義的・国粋主義的な志向である。この志向にトーマス・マンは、誤解に基づくとはいえ直感的な判断によってただちに気づいたと考えられる。

5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① 中島邦雄、トーマス・マンとアルフレート・ボイムラー－バッハオーフェン受容における屈折した軌跡（2）－、かいろす、査読有、48 号、2010、36－54

② 中島邦雄、トーマス・マンとアルフレート・ボイムラー－バッハオーフェン受容における屈折した軌跡（1）－、かいろす、査読有、47 号、2009、64－83

〔学会発表〕（計 2 件）

① 中島邦雄、トーマス・マンとアルフレート・ボイムラー－バッハオーフェン受容における屈折した軌跡（2）－、

② 中島邦雄、トーマス・マンとアルフレート・ボイムラー－バッハオーフェン受容における屈折した軌跡（1）－、

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
中島　邦雄（NAKASHIMA KUNIO）
独立行政法人水産大学校・水産流通経営学科・教授
研究者番号：00416455

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：